

塑性加工メーカーの 勝ち残りの条件とは

日本工業大学専門職大学院 横田悦二郎*

素形材産業を取り巻く環境

今、素形材メーカー（特に塑性加工メーカー）を取り巻く環境は、一部を除き全般的に安定した経済環境にあると言える。この環境をつくり出した背景はいくつか考えられるが主たる理由を考えると次のような要因がある。まず国内経済の視点から見ると以下の要因が考えられる。

1. 国内経済からの視点

(1) 輸出が好調

これは円安傾向（円が安いと言うより適正為替価格とも言えるが）による輸出好調要因だけではなく、世界経済全体が向上していることの方が影響力は強い。

(2) 今までなかった新産業の出現

今までの日本は“モノづくり日本”を柱とした運営がなされてきたため、景気動向は常に“製造業”が景気動向の主体となっていた。しかし日本にも遅ればせながら「モノづくりに依存しない各種の新産業」が発展しつつあり、現在日本のGDP全体における“製造業”の割合は製造業の海外移転の影響もありその比率が低くなり、景気の波の振幅が小さくなりつつある。

(3) “観光日本”の柱ができてつつあり経済に貢献し始めた

この数年間の海外からの観光客は積極的な政府支援により急激に増大しつつある。その観光客を相手にしたサービス産業は現在のところ“手探り状態”ではあるが独り立ちし始めており、今後も大きな発展が期待できる上、国内需要への貢献もあり“製造業”への良い意味での影響が出始めている。

(4) 流通革命による新産業創出

インターネットの普及と発展により、過去には予想もつかなかった新流通システムができ始めそれらに関係する新しい産業も顕在化しつつある。“製造業”も効率化の点でその恩恵を大きく受けている。

(5) IT 関連産業が本格化

残念ながら今までの日本のIT関連産業は国際的に見て遅れをとっていたと言わざるを得ない。欧米諸国はもちろんのことアジア地域の中国・インド・マレーシアにさえ遅れ始めていた。しかし前項のサービス業の創出や新流通革命により「日本独自の新しいIT関連産業」の起業が芽生え始めている。

などが上げられるが、一方グローバル経済の視点から見ると日本の“モノづくり産業”にとって必ずしも良い点ばかりではないことが起きている。その主たるものが以下に考えられる。

2. グローバル経済からの視点

(1) 現場とは乖離した中での為替変動リスク

グローバル経済下のなかでは単に「円対ドル」や「円対ユーロ」の為替変動だけではなく、今や

*（よこた えつじろう）：客員教授
〒380-0845 長野県長野市西後町 1626
TEL：026-232-2522

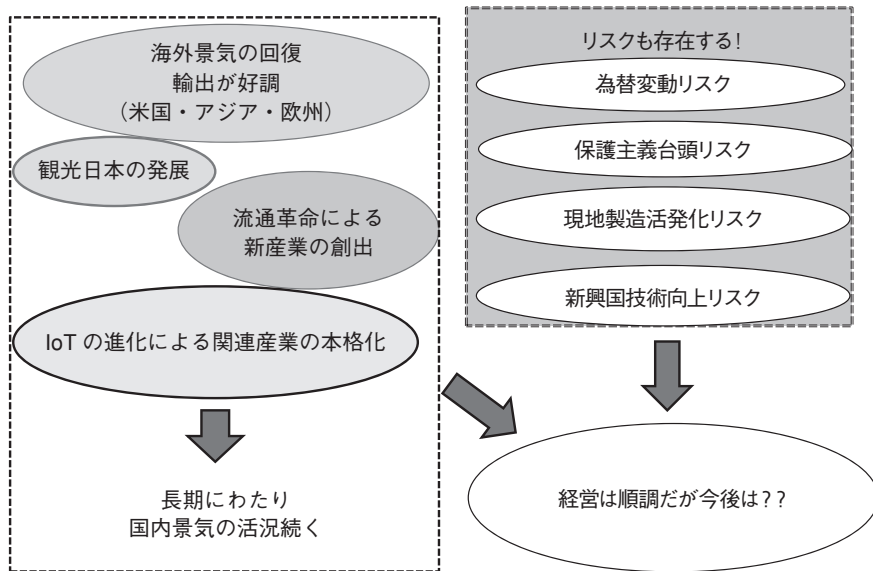


図1 日本の“素形材メーカー”を取り巻く環境

「円」対インドネシアルピーやタイバーツ」など新興国の為替変動が直接ビジネスに影響を及ぼしている。特に日本の塑性加工メーカーの場合は「アジア地域の現地通貨対円」の為替変動に大きく左右される。しかもこの国々の「為替変動」は同国の経済とは関係のない「ドルの変動」で左右されてしまい経営上の大きなリスクでもある。

(2) 自国第一主義による弊害

TPPが本格化する一方で、米国に見られるような「自国第一主義」の政策のもと「保護主義政策」を推進する国が増大しつつある。今後それらの国々がさらなる輸入制限の動きが出てこないか懸念される。

(3) 現地化の推進

“モノづくり”の分野では大半の国は貿易収支改善を図ると同時に、為替変動に左右されない製造コスト保持のために、現地生産による現地調達率を上げる動きが活発化している。結果として現地製造技術が向上し、日本からの輸出量が減少することは確実である。

(4) 海外新興国の技術向上

工作機械を始めとする装置技術の進化の流れはこれからも止まらない。これらの技術は「新技術を導入した装置」を購入すれば、即先端技術取得が可能になるため、海外新興国の技術は確実に向上し、日本企業の強力な競争相手になる。

以上記述してきたように、いくつかの懸念材料も存在するため、現在の経済状況が今後も安定的に続くことは期待できない。そのため、今やすべての企業が“勝ち残る”ための変化が求められている。次世代に到来する新環境下での“勝ち残りの条件”とは「新しい環境に対応した“正しい企業経営への変化”」でなければならないことは当然である。

では塑性加工メーカーは次世代に向けてどうすべきか？について、現状分析を基に考えてみる(図1)。

金属プレス加工業界および金型業界の現状と課題

まず金属プレス加工業界および金型業界の現状と課題について記述する。両業界とも共通して言えるのは「今後はかつてない変化を求められる」ことである。その理由は以下の通りである。

1. 変化の背景

(1) 多品種少量生産への移行

海外での現地生産が進むにつれ、塑性加工製品は海外市場で必要とする多量生産品は現地生産化され、日本国内で必要とする生産品は海外では対応できない多品種少量生産に向う。

(2) バリューチェーンの変化

今までの塑性加工製造は大企業の“ケイレツ”